小學部入學檢定に現はれたる

幼兒觀察の一調査

東京女子高等師範學校訓導　弘田芳弘

緒言

今般當校附屬小學校の第一學年入學志願者の選拔檢定中筆者はその直觀(觀察)力につき詳細に考査しその成績を通覽するを得たのである。故に以下その概要を記述し、最高年齡の幼兒としての百七十五名の觀察力の特質を吟味すると共に、小學校第一學年兒童の直觀指導の具體的資料としたいと考へる。

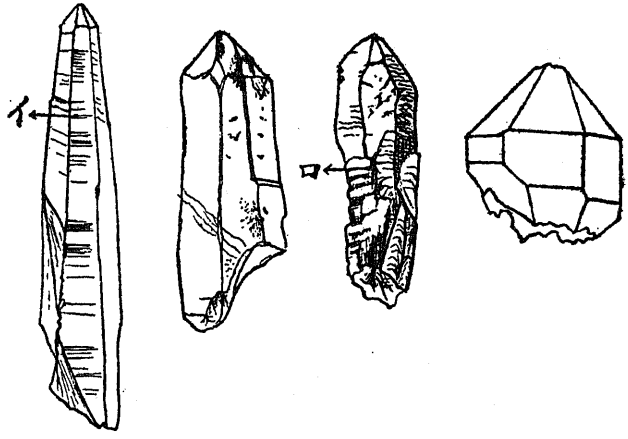
幼稚園保育の觀察補導は、小學校での觀察(直觀)の指導と甚だ趣を異にしてゐる事は存じて居るが、では實踐上の具體相如何となると遺憾乍ら經驗を有たないから述べられない。しかし小學校だけの直觀について言へば、先づ何といつても事物につき觀察しなければ眞正の研究ではないといふ事をよく兒童に體得させる事とその觀察はあらゆる感官を通じ出來るだけ多方面に亙る樣にといふ事を目標として指導して居るのである。更に觀察の內容的方向として常に兒童の統覺發達階段に卽して行ふ樣心掛けて居るのである。故に尋常一年頃の觀察は丁度事物期にある事こて(幼稚園年長兒も大體該期に屬する)、觀察された事柄がごんなに個々分離された兎糞的なものであつても割合重要とせずに、それよりは出來るだけ分量の多い、あらゆる方面を觀察する樣に指導してゐるのである。この態度が、やがて兒童が二、三年の統覺活動期に入れば漸次活動する部分、作用への注視に轉換されるのであるがこの場合活動期としての觀察の良否は一に前の事物期に於いての充實如何によるのである。

この意味で幼兒の觀察補導に於ても、唯觀察繪本による多少歪められた自然物の觀察のみでなく、直接の自然物を手に持つて觀察する樣、更に飼育し栽培しながら簡單な遊戲を通してのものであれば誠に事物期として申分のない發展を遂げるであらうと考へる次第である。

問題　I

昭和十四年一月二十六日調査　被調査者男兒七十五名

I 題問



問題

一、「これはみなでいくつか」

二、「この中からよく似たものごうし二つ手に持つてごらんなさい」(四個の中より比較選擇せしむる)

三、「これ(1)とこれ(2)とのごんなところが兩方ともよく似てゐるか」(抽象能力、類似點を述べしむ)

四、「これ(3)とこれ(4)とはごんなところが違ひますか、違ふところを皆言つてごらんなさい」(相違點を比較せしむ)

相違點、類似點を通じて妥當だと思はるゝ事項を擧げ得た數を得點數とした。但し五點を滿點とした故五事項以上の者は何れも五點と採點する。

五、水晶中1の(イ)の部分は稍〻綠色がゝり居るも12共に半透明。34共に紫色なるも2の(ロ)の結晶面に皺皮多く茶褐色をなす。

調査結果の總括を左に示せば

第一表　似て居るものにはどれをかたげ擧げたか

	外部よりの受驗者四七名(括弧内%)	當校附屬幼稚園よりの受驗者二八名(括弧内%)	計七五(括弧内%)	筆者の妥當とせるもの
四個なる水晶を手に持つて類似してゐるとせる者	34(72.3)	21(75)	55(73.3)	
數を直觀的に言ひ比較した者	14(29.8)	16(57.1)	30(40)	○
1と2を類似してゐるとせる者	28(59.6)	13(46.4)	41(54.7)	◎
3と2	3(6.4)	8(28.6)	11(14.7)	○
3と4	11(23.4)	7(25.0)	18(24)	○
1と4	2(4.2)	0	2(2.6)	×
1.2.3	3(6.4)	0	3(4.0)	

事物を手に持たないで比較する態度はよくない。殊に觀察する物が立體的のものでは尙更そうである。この點より言つて外部受驗者は三〇%が手に持つたのみであるのは多少場所馴れせぬ遠慮からもそうであらうがよくない態度である。

第二表　1と2とのと類似點如何

尖り方	兩方もと先が尖る	外部よりの受驗者四七名	當校附屬幼稚園受驗者二八名	計七五名	該類似點は何番目に擧げ得たか（平均番數）
斷じ口	斷じ口の方れが同	21(44.7)	21(75%)	42(56.0)	1.7同
面	兩方もとつるつる面が平で	18(38.3)	20(71.4)	38(50.8)	2.0
色	兩方もとつるぬていつすきは類似のに色	16(34.0)	7(25.0)	23(30.8)	1.7
稜	兩方もとがるあがじすかな眞るあ等ぐす	11(23.4)	3(10.8)	14(18.8)	1.5
質物	兩方もとあるがスラで	1 (2.1)	8(28.6)	9(12.0)	2.0
他の其	六角で点ある	0	4(14.3)	4(5.2)	1.5
一人に つき何個擧げ得た（總數）		1(2.1)	0	1(1.2)	2.6
		1.45 (計68)	1.9 (總計53)	1.88 (131)	

第三表　3と4との相違點如何及び總得點數

太さが違ふ	外部よりの受驗者四七名	當校附屬幼稚園受驗者二八名	計七五名	該相違點は第何番目に擧げたかの平均番數	
色が違ふ	38(80.8)	27(96.4)	65(86.4)	1.2	
斷れが違ふ	15(31.9)	13(46.4)	28(37.2)	2.2	
表面が違ふ	15(31.9)	12(42.8)	27(36.0)	2.2	
尖り方が違ふ	7(14.9)	13(46.4)	20(26.4)	2.6	
稜が違ふ	4(8.5)	9(32.2)	13(17.2)	3.0	
質物が違ふ	3(6.4)	3(10.8)	6(8.0)	2.1	
其他の（重さ）	2(4.2)	1(3.6)	3(4.0)	4.0	
一人に つき擧げ得た個數（總個數は内（ ））	1.77個 (84個)	2.78個 (78個)	2.16 (162)		
總得點 0	0	0			
1	1(2.1%)	0	1(1.3)		
2	9(19.2)	0	9(12.0)		
3	8(17.0)	1(3.6)	9(12.0)		
4	12(25.6)	7(2.5)	19(25.3)		
5	17(31.9)	20(71.4)	37(49.3)		

第二、三表を通じて見ると相違を見出す事よりも、抽象して共通の類似を擧げる方が困難である事は、七十五名で相違點總計一六二個、一人平均二一・六個を見出したのに比べて、類似點を見出す事は總計一三一個、一人平均一・八八個といふ割合になつてゐるのでもよく分る。

相違點として誰もが注目してゐてしかも眞先に見出して

るるのは、4は太いが3は細いといふ事で外來者八〇・八%、附屬園九六・四%の者が直覺的に擧げ得てゐる。しかも平均一、二番だから、先づ第一番目に述べた者が悉んど大部分であつて、他の色よりも何よりも直覺的に全般的の形の大觀について直覺してゐるのである。其の他の相違點となると多少見比べた上で考へて述べて居るので何れも平均番數が二番目から三番目前後である。最も困難である點としてはきれいかごうか(六名)、重さの比較(三名、四番目)である。筋覺に訴へて重量の相違を見出した三名は甚だ優れた者と言はねばならない。

類似點の方では、兩方とも先が尖る、割れ方が斜め、かぢけかたが同じと言つた者が何れも約半數で、割合平易な分り易い點で、兩方とも面が平である(三〇%)。透明度如何(一八・八%)を吟味した者は更に少く、稜について擧げ得た者はたつた九名にしか過ぎず、六角形であるのを數へたのは七十五人中唯一名であつた。

第二、三表を通じて幼兒の觀察の一般的傾向を見てみると、幼兒は大體輪廓的な外觀はよく觀察するといふ事が分る。即ち太さの違ひ(八六%)、類似點では尖り方(五六%)、斷れ方(五〇・八%)等で率の高い事はこれを示してゐる。しかし內容的、構成的な部分の觀察となると稍〻困難で、實際に4は大變きれいで3は醜いのであるがそれを相違點として述べてきれいかごうかと言つた者が八%、その內容の他の方面よりの觀方として色の相違(三七%)、表面の狀態(二六%)は低率である、又直覺的に分る太さの違ひを尙精細に吟味してみるとそれの構成要素として尖り方の違ひ(一七%)は擧げ得たが更に內部的に結晶面の相違等となるとそこまで觀察が及ばないのである。更に內部的構成的觀察に未だ充分でない例を、類似點の方でみると構成要素としての面(三〇%)、色(一八%)、稜(一二%)、物質(五%)、六角(一%)の觀察が困難である事でよく分るのである。そこで若し水晶を幼兒に畫かせたらきつと影繪の樣なものを畫くに違ひないと思ふ。その繪には誰も必ず尖るところ、割れた部分、太さ等は落さずに畫が面、色、稜等は現されないものになるだらうと。右の調査結果より考へるのである。

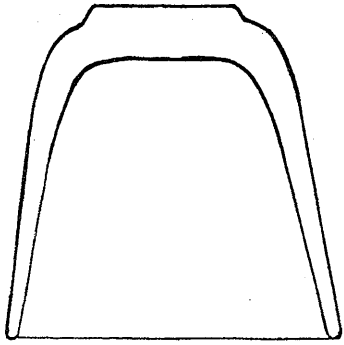
最後に附言して置く事は、當校附屬幼稚園よりの二十八名が他の志願者に比して特筆に値する成績を示してゐる點である。これはその原因は一つには彼等は地の利を得て場所馴れしてゐるせいも有らうが、それよりもより重要な事は、入園に際して激烈な競走に既に大部分が淘汰された結果の極めての優者である事と、保育に於ける觀察の適切な事とであらうと思ふ。第三表には五點以上は表してないが、六個以上の觀察に更に點數を加へた結果はとなると又

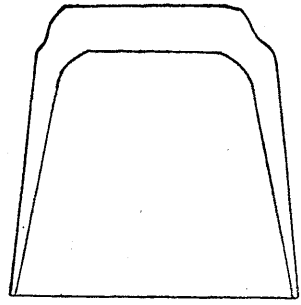
非常な距りが生じて來るのである。

問題 Ⅱ

被調査者女兒百名、一月二十五日

Ⅱ 題 問





一、「これは何ですか　何をするものですか」

二、「この二つを比べてどんなところがちがふか、みんな言つてごらんなさい」

次圖(實物大)の樣な無色透明の二つのガラス製コップにつき比較して相異點を言はしめるのである。

そして擧げ得た相異の數を得點數としたのである。

次にこの觀察點の全般及びその遲速度合ひを示してみると

第四表

觀察要項	被考査者100名	答へた番數(平均)	比較(小學校兒童) 二年女兒Y子	三年女兒K子	六年女兒M子	六年女兒M・T子
大小に答へた者	43	1.44	①	⑤	①	②
高低を擧げた者	48	2.56			③	
底の徑比較	79	2.88	②	④	⑥	⑧③⑤
太細い	43	1.72		②		
スラガの厚さ比較	37	3.35	④	①	④	⑥
側面の曲度違ひ	46	2.21	③		⑤	①④
徑口比較	26	3.11		③	②	⑦
容積の多少	6	3.83				
大コップの口緣に一部分ずつ擧げた者	12	4.16				
重さの違ひ	6	3.5				
其他	8			⑥		

この調査に於て二つのコップを比較して相違點を全く擧げ得なかつた者が二名あつた。「どんなところがちがふか」の意味が分らない程度の幼兒でその中の一名は大コップを小コップの上にうつぶせに被せて後默してゐたし、他の一名は全然一言も發しなかつた。

一箇所だけ相違點を擧げた者　六名
二點の者　十三名
三點　二十九名
四點　二十四名
五點以上　二十六名

この五點の中には相違點七八を擧げ得た者があつた。

最も容易であつたのは、糸底の口徑を比べてみると大コップの方が小さい事で、內をのぞき込んで居ると、直ちに分る事であるから七九％の多きに達してゐるが、一、八八番目卽ち平均第三番目に答へ得て居るから、よく觀てゐると誰れでも容易に見出し得た事柄であらう。直覺的に見出される相異は大小（一・四四）、太細（一・七二）で前者の方は大體眞先に答へ得てゐるのであるが、四三％しか答へ得てないのは不思議と思ふ。

最も困難な點は大コップの口緣に一ヶ所大へん小さな凹んだところがあるが、小コップには無いのを見出す事であらうたつた十二名でありしかも四・一六番目だから、四、五ヶ所以上相違點を見出す優秀者のみが色々と各方面から觀察した末、やつと氣のついた事柄である事が分る。

この幼兒の觀察を小學部二、三年兒童の中等兒と比較して見ると全く大差のない事が第四表比較にて分るので、吾々が試みに考査されたとしても餘り澤山見出す事は出來ないと思ふ。しかし高學年に進むと六年女兒の如く唯糸底の部分の觀察に於ても各方面より見て居るので、唯底の丸が大きい小さいのみでなく更にこれと連關して上からのぞき見て側面より、底面よりながめてその相違を述べて居るのである。

これ等の觀察の結果、事物期としてその個々物につき枚擧、羅列する事は、大體幼兒でも兒童でも大した變りは無い事が分るのである。そこで事物期として出來るだけ多方面的に數多き觀察をなし得る樣に指導して該期を充實して置く事は次の活動期、性質期への發展の基礎となると考へるのである。

結言

以上二調査を通じての結果をそのまゝ現す事に務めたのである。幼兒保育に無經驗の筆者には、勝手な解決を下して觀察の趨向の大觀をする事は出來ないからである。故に大方の御適切なる御判斷を御願ひする次第である。